

## 今道子——虚と実が織りなす美の世界

Yamada Akiko  
山田 明子

立てかけられた丸い大きな文字盤の時計の前にシルクハットが置かれている。キラキラと輝くその帽子には、よく見ると小さな眼がたくさん付いている。ぎょっとして目をこらすと、魚の頭がびっしりと貼り付けられているではないか。帽子の黒いリボンの脇には薔薇の花、正面には小さな懐中時計が飾り付けられている。そして帽子の上には古風な丸眼鏡が置かれている。「潤目鰯+シルクハット, 1994」と題された今道子の写真である。

今道子は、1970年代の終わりから、このように魚や野菜などの食材や、花、昆虫などを素材にしてオブジェを制作し、それを自ら撮影し印画紙に焼き付けて、写真作品として発表している写真家である。今は、古都鎌倉の、緑に囲まれた静かな洋館で育ち、現在もそこに住んでいる。骨董が趣味だった父君によって集められたアンティークの品々や家具が半世紀以上もそこにたたずみ、家族をやさしく包み込んでいる館。その中で、今の豊かな想像力によって創り出されたオブジェは、窓から差し込む柔らかな自然光を使って撮影されている。今が好んで使う素材は、鎌倉近郊で獲れる新鮮な魚や野菜といった食材であり、帽子、ブーツ、ワンピースなどの日常的な身のまわりのものである。ミッション系の学校に通っていたこともあり、今にとって身近な、十字架や百合やイエスの肖像などの宗教的なものがモチーフとして使われることも多い。鱻や鰯や鯖といった鎌倉の海の幸を素材として制作していた今は、東京の築地にアトリエを持ってからは、全国から築地市場に集まる食材を用いるようになり、のちに鶏や鴨も素材に加わるようになった。

今は、もともと美術学校で版画を学んでいたのだが、版画制作の中で、写真で合成して写真製版を行い、シルクスクリーンやリトグラフを作ったことが、写真に親しみ、それを表現の媒体とするきっかけとなったという。初めは版画の素材としての写真であったが、今が写真という媒体の持つ様々な魔法を使うようになるには、いくらか時間がかからなかった。想像上の世界を写真にするようになると、今は素材の持つ感触や輝きをよりリアルに表現するために焼き付けの試行錯誤を重ね、モノクロームの印画紙上にますます独特の写真世界を描き出していた。1990年代のことである。「非普通、非日常を写真にして、絵空事のようなことを現実化したいと思います。ものの生物化、生物の物質化といろいろな事を試してみたいと思います」と無邪気に遊ぶ子供のように語っている。

想像力を膨らませて、長い時間をかけて思い描いたりすることに比べると、それを実際に作品化する作業はそれほど時間がかからないという。オブジェの制作は、まるで料理教室さながらに、素材を適度な大きさに切り揃えることから始まる。素材の下準備をしておいてから、組み立てに取りかかる。手を抜くことなく丹念に進められる様子は、まさに料理人のそれを思わせる。生ものゆえに、時間はかけられない。美しく輝く時を写真に収めるのだ。食物として販売されている鮮度のいい魚や野菜、これらの素材で創られたオブジェは、今道子によって新たな物質として、または、生き物として「生」を与えられる。想像のままに丁寧に組み立てられ撮影されたこれらの写真は、五感を刺激し、虚と実が織りなす独特な美の世界を私たちの前に



photograph copyright © Michiko Kon

表している。ともすればグロテスクとなりかねないこれらの作品は、作者のたぐい稀なセンスの良さと上質な素材によって、上品なものとして生まれ変わっている。現実にある素材を使い非現実のものを創り出し、現実を映し出すという、写真ならではの表現である。

今道子の作品には、眼のついた魚が好んで使われている。また、誰かの顔写真から切り抜いた人の眼が貼り付けられていることもある。その眼は、心に深く刻まれたある人物の眼であったり、今本人の眼であったりする。作品を見ている私たちが、逆に今自身から見られているかのような錯覚に陥ることがあり、それが新たなスリルと楽しみを与えてくれると言ってもいいだろう。自己と他者を結びつけ、一方で拒絶する、という意識を象徴するかのような「眼」。時間のつながりや限りある生を暗示させる「時計」、そしてそれを静かに包み込む光は、何か神聖なものを表しているように思える。生と死、明と暗というように、常に二つの相反する要素を知覚している作者の姿がそこにある。

「写真は仕事だと思っている」と語る今道子

は、ここ数年長い休憩に入っている。「永遠という言葉が好きで、写真の中で時間を止める遊びを楽しんでいたのに、最近、永遠という言葉をきくと、頭からビニールの袋をかぶせられたような息苦しさを感じる。ものは壊れなくては、ものは時間とともに姿を失われなければと思う」と1998年に書いているが、その後、変わらずに身のまわりに流れている時間と、急速に変わっていく時間のほさまに身を置きながら、年月を積み重ねて、今道子は、私たちの思いもよらないような新鮮な驚きに満ちた魅力溢れる新たな作品を創り出していくことだろう。

今道子 (こん みちこ)

1955年 神奈川県に生まれる。

作品は、東京国立近代美術館、東京都写真美術館、ジョージ・イーストマン・ハウス国際写真美術館、アリゾナ大学センター・フォー・クリエイティブ・フォトグラフィー、プリンストン大学美術館などでコレクションされている。

『Michiko Kon』

1999年 Aperture ハードカバー